



日本取引所グループ
ロンドン駐在員事務所
アンナ・ヒル

—連載（第16回）—

ロンドン市長選、労働党支援者の勝利は本当に“労働党”の勝利？



■ 1. はじめに

2016年5月5日、ロンドン市長選が行われ、6日に結果が発表された。8年に渡り市長を務めてきた保守党のボリス・ジョンソン氏が去年の総選挙で国会議員に選出され、市長を任期満了で辞めることを明らかにしていたことから、今回は現職不在の市長選挙となった。結果は、労働党の勝利で、イスラム教徒のサディック・カン氏が市長に選出された。

ロンドン市長選の投票の仕組みは、日本であまり馴染みのない方法ではないか。投票者は第1選択と第2選択を記入する。第1選択の集計で50%超を獲得した候補者がいれば、そこで勝者が決まるが、いなければ3位以下を落選とし、当該落選票の第2選択で上位2位までの候補者を選んだ票が第1選択の結果に加算され、最終的な順位が確定される^(注1)。

前回同様、今回の市長選挙もいずれの候補者が第1選択で50%超の票数を獲得しなかつ

たことから、第2選択の票が反映されることとなった。労働党候補者サディック・カン氏VS保守党ザック・ゴールドスミス氏の選挙結果は2. で詳細を説明するとして、ここで特筆すべきは、みどりの党が5.8%を獲得したことであろう。全国で議会議員が1人しかいない政党が、8人の議員を有する自由民主党の票数を上回ったことは、みどりの党にとって大成功といえるのではないか。

他方、ロンドン市長選の開票日（5月6日）には、イングランドの124地方自治体に係る議員選挙や、スコットランド、ウェールズ及び北アイルランドに係る議会議員選挙も行われた。これらの選挙で注目すべきは、昨年の総選挙で一躍注目を集めたスコットランド国民党（SNP）であろう。スコットランド議会で第1党の地位はかろうじて死守したものの、保守党が大幅に議席を増加させ、SNP過半数の状況が崩れた。労働党は大幅に議席を失い、第2位から第3位へ転落した。保守党の躍進により、SNPがスコットランドの独立



選挙結果（投票率45.3%）

名前	政党	第1選択	第2選択	合計
サディック・カン (Sadiq Khan)	労働党 (Labour)	44.2% 1,148,716票	65.5% 161,427票	56.8% 1,310,143票
ザック・ゴールドスミス (Zac Goldsmith)	保守党 (Conservative)	35.0% 909,755票	34.5% 84,859票	43.2% 994,614票
シアン・ベリー (Siân Berry)	みどりの党 (Green)	5.8% 150,673票	—	—
キャロライン・ビジョン (Caroline Pidgeon)	自由民主党 (Lib Dem)	4.6% 120,005票	—	—
ピーター・ウィッスル (Peter Whittle)	イギリス独立党 (UKIP)	3.6% 94,373票	—	—
その他6名		6.8% 173,439票	—	—

を要求することは難しくなったとの見方が強い（注2）。

■ 2. 勝因は敵失？

ロンドン市長選に話は戻るが、カン氏は、日本のメディアでも欧州初のイスラム教徒市長ということで注目を集めた。実際、イギリスのメディアも、そのようにカン氏を論じることもあった。

イギリス市民の民意を正確に説明することは難しいが、世論調査によれば、ゴールドスミス氏の人気あまりに低かったということである。ゴールドスミス氏が「お金持ち」ということで低所得者の多いロンドン庶民から不人気だったこと、またヒンドゥー教徒市民の票を目標にインドのモディ首相に対して支援要請のメッセージ等を送り、反イスラム感情を利用しようとしていたことが明らかになってしまったことも1つの要因であろう。

他方（注3）、キャメロン首相が同党のゴールドスミス氏を支援するため、相手候補のカン氏が以前関係を持っていた急進イスラム教徒の存在を指摘すべく、カン氏を「急進的（“Radical”）」と表現して、カン氏の危険性に関心を呼び込もうとしたが、カン氏はイスラム教の“穏健派”として知られる存在であり、首相の攻撃にもダメージを受けることはなかった。カン氏はこれらの攻撃を人種差別として強く批判することで反撃し、市民を味方に付けた。

一連のゴールドスミス氏側の選挙戦略は、相手を如何におとしめるかに終始したため、まさに汚いやり口（dirty campaign）であった。選挙後、ゴールドスミス氏側の選挙運動は、保守党内だけでなく自分の家族からも批判を受けた（注4）。

カン氏は相手の敵失で有利に選挙戦を進めることができたが、苦心したのは身内である労働党との関係であった。現在、労働党党首

は、強硬左派のコービン氏で、同氏が党首になった昨年以降、労働党とビジネス業界との関係は悪化した。カン氏はビジネス業界との対立を避けるべく、身内である労働党を批判する戦術に出て、これが効を奏した^(注5)。

以上のとおり、カン氏の勝利は、労働党の勝利というよりは、カン氏自身の勝利だったと考えるのが適切ではないか^(注6)。

■ 3. 課題は山積

カン氏は労働党から一定の距離を置いて市長に選出されたが、同党の支援を受けてロンドン市長になった以上、労働党の有力者に位置付けられるだろう。そのため、今後は労働党が引き起こすスキャンダル等にどのように対処するかによって、カン氏が歴史に名を残す大市長になれるかどうかが決まるだろう。直近では、市長選投票日の1週間前に元ロンドン市長・労働党国会議員であるケン・リビングストン氏が、反ユダヤ的と受け取られる発言をしたスキャンダルがあった。リビングストン氏はすぐに党員資格停止となったが、評論家等からは、労働党全体に反ユダヤ主義の傾向があるとの批判が繰り返され、コービン党首は、実態究明のため独立機関によるレビューを行うことを公約した。このスキャンダルの影響は大きく、労働党に対するユダヤ人の支持は急減したという。前述のとおり、カン氏は労働党との距離を置く戦術に出たため、市長選での影響は限定的であったが、コ

ービン氏が党首であるうちは、何かとスキャンダルが起ると予想され、カン氏にとっては要注意である。

次に、ロンドン市長として、慢性的な住宅不足、また住宅・オフィスビル等の建設boomによって引き起こされた交通問題は喫緊の課題であり、またヒースロー空港の第3滑走路の計画への対処も中期的な難問である。政府は、第3滑走路を作る方針を示しているが、カン氏はロンドン市民の過半数が反対していることを受けて、今後“反対”のロビー活動を行うことになる。加えて、イスラム教徒を中心とした移民の急増や、潜在的な反イスラム感情に対してもバランス感覚を持った対処が求められる。さらには、どこの都市でも同じだが、貧富の格差解消問題も市長の大きな仕事である。

最後に、ロンドンならではの課題は、Brexitとどう向き合うかであろう。6月23日、英国ではEU離脱を問う国民投票（レファレンダム）が行われるが、現時点では、国民の意思は拮抗しているという。国民投票の結果がどちらになっても、ロンドンが引き続き、政治及び経済、特に金融面において、世界の中心という地位を堅持できるのか、ロンドン市長の責任は大きい。刻々と6月23日のレファレンダムが近づいてきている。サディック・カン新市長が、世界のロンドンをどのような方向に導くのか要注目である。



(注1) <http://www.bbc.co.uk/news/election/2016/london>

(注2) <http://www.bbc.co.uk/news/election-2016-scotland-36227709>

(注3) <http://www.ft.com/cms/s/0/e52d78e0-0a5b-11e6-9cd4-2be898308be3.html>

(注4) <http://www.ft.com/cms/s/0/a90c5284-1382-11e6-91da-096d89bd2173.html#axzz48GE7HVUC>

11e6-91da-096d89bd2173.html#axzz48GE7HVUC
(注5) <http://www.theguardian.com/politics/2016/may/07/sadiq-khan-londoners-deserve-better-tory-campaign>

(注6) <http://www.ft.com/cms/s/0/691b63aa-12cd-11e6-839f-2922947098f0.html#axzz48GE7HVUC>

